

平成 21 年 8 月 27 日

各位

拝啓 残暑の候、時下ますますご清祥の段、お慶び申し上げます。平素は格別のお引き立てをいただき、厚く御礼申し上げます。

このたび弊社コーポレートシチズンシップの翻訳事業第 4 作目となる、ロバート・F・ブルナーおよびショーン・D・カー共著「ザ・パニック-1907 年金融恐慌の真相（原題”The Panic of 1907”）」が東洋経済新報社より刊行されましたので、ここにお届け申し上げます。

これまで弊社の翻訳事業はグローバリゼーションを中核テーマとして取り組んでまいりました。とくに書籍については、サプライチェーンや経済開発問題（「あなたのTシャツはどこから来たのか？」ピエトラ・リボリ著）、資本主義偏重による民主主義の衰退（「暴走する資本主義」ロバート・ライシュ著）、対中貿易問題や消費者問題（「チャイナフリー」サラ・ボンジョルニ著）などグローバリゼーションによって生じた功罪を扱う良書の翻訳を手掛けてきました。そして今回は、社会経済活動の根幹を成す分野でありながらも、私たちが書籍の翻訳を手掛けてこなかった金融問題を扱う機会を得ることができました。

私たちは、今回の米国発の金融危機が経済界だけの問題に留まらず、政治や市民社会にまで広く影響を及ぼしていることに着目しました。一般的に、世界経済が順調に拡大しているときには、政治家は毎年多額の利益を上げる大企業が自らの票にみえてきまうのでしょうか。その結果、規制緩和、減税等々に見られるように、経済活動が好調なときにその恩恵を受けるのは、一般市民ではなく大企業ということが多いようです。これは 100 年前の 1907 年金融恐慌が起こる前の米国経済の好況期にもそうでした。

しかし、割を食うことになった市民がいつまでも黙っているわけではありません。世論の変化を感じ取り、大企業の行動に何らかのタガをはめなければと考える市民派リーダーが誕生するのは必然なのかもしれません。1907 年の恐慌においては、それがテディと親しみある愛称で呼ばれていたセオドア・ルーズベルト大統領でした。金融家や大企業を「悪の大富豪」と呼び、大変人気の高かった市民派のルーズベルト大統領ですが、このときばかりは、最終的には国益を守る大統領として冷静な判断を下し、さらにマスコミを通じて市民や産業界の動揺を鎮める役割を果たしたとされています。しかしその背後には、J・ピアポント・モルガンを中心とした金融界からの必死のロビー活動がありました。世論をバックにつけた行政からの規制を嫌う業界と富の源泉たる金融活動を無視できない政界との微妙な駆け引きが繰り返されていたのです。

そして、今回の 2007 年サブプライム危機です。大企業寄りと言われた共和党ブッシュ大統領は、在任中、危機克服の抜本的な対策というよりは、大が小を飲み込む市場メカニズムに任せた救済策に甘んじていました。結果的にこれが受け身の対応となって危機を悪化させたわけですが、2009 年にオバマ政権が誕生すると、矢継ぎ早に大胆な金融危機対策が出されます。100 年前のルーズベルトのように、国民の人气が非常に高いオバマ大統領は、財界よりも市民の生活や福祉を向上するための政策を中心に打ち出しており、悪化する金融危機の底割れを回避するために、大手生命保険会社など金融機関への税金投入も辞

さない大胆な支援策を決めました。2009年8月現在、1年前のサブプライム危機から生じた金融危機・経済不況はいまだ終息していません。しかし、市民社会の役割を信じるリーダー（大統領）が市民の利益を優先し、そうした上で産業界を支援することは、直接民主主義では当然の理屈とはいえ、政治力学的には難しいことに取り組んでいると評価すべきなのでしょう。古今東西を問わず、企業と市民の利益を両立させることは政治的に非常に困難だということが改めて理解できます。

本書を書いたのは、全米トップクラスのビジネススクールであるバージニア大学ダーデン経営大学院学長のロバート・F・ブルナー教授で、金融や投資に関するケーススタディを数多く執筆する同分野での第一人者です。共著者のショーン・D・カー氏は、CNNやABCニュースで活躍した元ジャーナリストで、現在同経営大学院バッテン研究所企業イノベーションプログラム・ディレクターとして起業家精神やリーダーシップを研究しています。金融とジャーナリズムに精通した二人の手による本書は100年前の金融危機を非常に分かりやすく説明し、現在の危機との共通点の分析、そして今後の金融危機に向けた教訓を提供しています。ぜひご高覧頂ければ幸いに存じます。

敬具

<ご参考：各章のトピック>

100年前金融恐慌(1907年金融恐慌)について、金融恐慌発生前の市場環境や米国内外の社会経済情勢を主要人物に焦点を当てて解説

第1章－ウォール街の支配者たち

第11章－古典的取り付け騒ぎ

第2章－システムへのショック

第12章－おそらく必要とされるであろう支援

第3章－「静かなる」暴落

第13章－アメリカ信託会社

第4章－やせ細る信用

第14章－取引所の危機

第5章－銅^{コッパー}の王者

第15章－渦中の都市

第6章－買い占めと引き締め

第16章－興奮のるつぼ

第7章－ドミノ倒し

第17章－現代のメディチ

第8章－資金決済機構^{クリアリング・ハウス}

第18章－迅速かつ徹底的な救済

第9章－ニッカーボッカー信託会社

第19章－危機脱出

第10章－不信任投票

第20章－連鎖反応

1907年金融恐慌を中心に過去の金融危機からパニック(市場の暴落)が起こる「パーフェクト・ストーム」の7要素を解説 教訓－パーフェクト・ストームという名の金融危機

100年後に発生した2007年サブプライム危機をパーフェクト・ストームの7要素をもとに分析

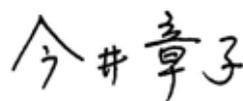
100年後の考察 二〇〇七年サブプライム危機



雨宮 寛

コーポレートシチズンシップ代表取締役

明治大学公共政策大学院兼任講師



今井 章子

コーポレートシチズンシップ取締役

東京財団広報部ディレクター

昭和女子大学非常勤講師